東洋の思想と宗教　第三十八號　令和三年（二〇二一）　三月　拔刷

明清變革と林羅山・鵞峰

永冨青地

明清變革と林羅山・鵞峰

永冨青地

明から清への王朝交代は、中國本土のみならず、海を隔てた日本においても非常な關心事であった。特に、明清變革が單なる王朝の交代に止まらず、漢族から女眞族への支配者の交代も伴うものであったため、華夷の辨に嚴しい儒者にとっては、一大事といえるものであったのである。

明清變革當時の日本において、中國の事情に最も詳しかった儒者としては、幕府の事實上の外交顧問の地位にあった林羅山（道春、天正十一年［一五八三］～明暦三年［一六五七］）およびその第三子であり父の後を繼いだ林鵞峰（春齋、元和四年［一六一八］～延寶八年［一六八〇］）を擧げることができる。彼ら二人、特に林家の初代に當たる林羅山については、以前は江戸初期の幕府のイデオロギーを朱子學へと決定づけた人物として非常に重視されてきたが、今日では、そのような力を彼が幕府に對して有していたことはなかった、とされるようになってきている。(1) しかしながら後述のごとく、少なくとも對中國の外交においては、羅山及び鵞峰が將軍や老中といった、幕府における最高權力者たちからも重んじられていたことは確實である。

それでは、彼ら二人は明清變革についてどのような見解を殘しているのであろうか。まず羅山は、清軍と南明軍との激戰が續いている最中の正保三年（一六四六、順治三年）冬に記したその論文である「過明論」(2)において、「風聞丙戌季秋之末、韃人入延平、而福京亦亂敗。不知果如何也（風聞す、丙戌［正保三年］季秋の末、韃人、延平に入りて、福京も亦た亂れ敗

る、と。知らず、果して如何）」と、同年九月までの福建省での戰況を述べた後で、「今見其人物風俗、則中國與江南古人禮儀法制政事文章有猶在。與北虜羶腥之卑而不知禮儀、去禽獸不遠者、霄壤懸隔（今、其の人物風俗を見れば、則ち中國と江南と古人の禮儀法制政事文章、猶ほ在ること有り。北虜羶腥の卑しくして禮儀を知らず、禽獸を去ること遠からざる者と、霄壤［せうじやう］の懸隔なり）」と華夷の別を強調しているにもかかわらず、「今之韃酋所爲、善惡未可知也（今の韃酋の爲す所、善惡未だ知るべからざるなり）」と、清朝皇帝については善惡の斷定を避け、最後には話をそらして長崎に來航する南蠻船を取り締まるべきかについて、「不在其位、不謀其政。則國家者非散焉者之所議也（其の位に在らざれば、其の政を謀らず。則ち國家は散焉者の議する所に非ざるなり）」と、斷定を避けつつその文を終えている。

一方、その子である林鵞峰は、三藩の亂の最中である延寶二年（一六七四）六月に執筆した「華夷變態序」[3]において、吳三桂の檄文について觸れ、「頃間吳鄭檄各省、有恢復之擧。其勝敗不可知焉。若夫有爲夷變於華之態、則縱異方域、不亦快乎（頃間［けいかん］、吳鄭、各省に檄し、恢復の擧有り。其の勝敗、知るべからず。若し夫れ夷、華に變ずるの態を爲すこと有るときは、則ち縱ひ方域を異にすとも、亦た快ならずや）」[4]と、自己が吳三桂の側に心情的に荷擔していることを明らかに示している。

これらの文を見る限り、彼ら父子の明清變革に對する見方には、大きな違いがあるように思える。しかしながら、明清史研究の專家である川勝守は、林鵞峰のこの文について、「『夷狄が中華の態を變えるのは愉快だ』と言い放って、儒の本家中國に頭の上がらぬ儒者の無邪氣さが現れていて面白い」[5]と、鵞峰が清朝の側に肩入れしていると誤讀した上で、「華夷變態序」には、儒教の本家である中國に對する日本の儒者のコンプレックスの裏返しである「無邪氣さが現れていて面白い」と、これを局外者による無責任な放言に過ぎないとしているのである。また、日本思想史研究の專家であり、林羅山に始まる林家に關する多數の專論を發表している眞壁仁も、「華夷變態序」の解釋においては川勝氏の誤讀を受け繼ぎ、「夷狄である滿洲人が中華となるような事態の招來を、異邦の傍觀者の立場から愉快であると評した」[6]と、「異邦の傍觀者の立場から」のものであると解釋し、川勝氏と同樣の見解を述べている。本論文においては、林羅山、そして特に林鵞峰の上記の文が、本當に「無邪氣」な「異邦の傍觀者の

立場から」のものであったのかを、これらの書簡の執筆の背景から探っていきたい。

初めに、明清變革の同時代において、日本の知識人、特に中國に最大の關心を有する儒者たちが、中國の最新事情を知り得ることができた情報源について、簡單に述べていきたい。

それらのうち時間的に最も先行するのが、朝鮮半島釜山にあった、對馬藩の貿易居留地である倭館からのものであろう。[7] 仁祖五年（一六二七、天啓七年、寛永四年）に朝鮮王朝の國王である仁祖は女眞軍に降伏したが、その翌年（一六二八、仁祖六年、寛永五年、崇禎元年）、對馬藩主である宗義成は幕府からの呼び出しを受けた。その際、將軍家光は義成に對して、「此ころ韃靼人朝鮮の西邊を侵掠するよし聞召るれば。歸封の後速に朝鮮の王城へ使者をつかはし。そのさまつぶらに巡察せしめ。もし王城急難あらば。援兵をつかはすべし」[8]と命じていることからも、このことは明らかである。なお、それ以降の朝鮮からの女眞族（清朝）に關する情報は、長崎の唐人からの情報を收集した、後述の『華夷變態』のなかに吸收されている。

次に擧げるべきなのは、日本人自身による見聞の記錄である漂流記であろう。周知のごとく、江戸幕府はいわゆる「鎖國」を國是として日本人の國外への出國を禁じていたが、沿海航路で漁業・商業に從事していた人々が海難により異國に漂着、歸國した場合においては、尋問の後、その生國に歸すのを常としていた。そのような尋問の際の記錄は多くの場合筆寫され、寫本としてひそかに讀み繼がれていたのである。[9] 明清變革の際の中國への漂着の記錄としては『韃靼漂流記』が現存している。[10] 本書は寛永二十一年（一六四四、崇禎十七年、順治元年）に韃靼（ロシア領ポシェト灣付近）に漂着、韃靼の都である盛京（現在の瀋陽）から遷都直後の北京へ護送、皇帝（順治帝）の謁見を經て、ソウル、釜山經由で對馬に歸國するまでの經過を口述したものであるが、入關直後の清朝統治の實態を率直に述べている。例えば韃靼の人々については、「主と下人との作法、親と子の如くに見へ申候。召仕候者をいたはり候事、子のごとくに仕候。又主をおもひ候事、親のごとくに仕候ゆへ、上下共に親しく見へ申候」（『韃靼漂流記』、平凡社、二七頁）とその結束の堅さを述べる一方、北京の人々については、「北京人の心は、韃靼人とは違い、盗人も御座候、僞も申候、慈悲も無之かと見へ申候。去ながら、唯今は韃靼の王、北京へ御入座候に付、韃靼人も多く居申候、御法度萬事韃靼の如くに仰付候て人の心は能成候はん

と韃靼人申候」（同上、三〇頁）と評するなど、一次資料として極めて興味深い内容に満ちているのである。しかしながら、この種の漂流記は刊本としての流布が禁じられていたため、前述のごとく寫本としてごく一部の人の目に止まるのみであり、一般の中國觀に影響を與えることは無かった。[11]

第三に、中國よりの亡命者の記録を擧げることができる。彼らのうち、日本の儒者に最も多くの影響を與えたのは朱舜水（萬曆二十八年、一六〇〇～康熙二十一年、一六八二）である。周知のごとく、順治十六年（一六五九、永曆十三年）に鄭成功軍に參加していた朱舜水は、鄭成功軍の長江流域での作戰の失敗後、日本に移住し、同時代の中國の政治、文化などあらゆる方面での權威者として、多くの著述を殘したのである。その彼が、明清變革に關する自己の見解の總決算として、寛文元年（一六六一、永曆十五年、順治十八年）に口述した記録が、「陽九述略」である。[12] 我々はそこに、明清變革を文字通り實地において體驗した朱舜水による生々しい記録を期待するのだが、實際に讀んでみると、その内容が迂遠であることに驚かされる。例えば、そのなかの明朝が清軍に敗北した理由を述べている「致虜之由（虜を致すの由）」においては、明衰亡の要因として、「明朝以制義擧士。初時功令猶嚴。後來數十年、大失祖宗設科本旨（明朝、制義を以て士を擧ぐ。初時功令猶ほ嚴なり。後來數十年、大いに祖宗、科を設くるの本旨を失ふ）」（『朱舜水集』一頁）と、明朝開始以來の科擧の弊害による人心荒廢を擧げており、清軍打倒の祕策を述べた「滅虜之策（虜を滅すの策）」においては、その冒頭において「滅虜之策、不在他奇、但在事事與之相反。彼以殘、我以仁。彼以貪、我以義。解其倒懸、便已登之衽席、出之湯火、斯爲沃之清涼（虜を滅すの策、他奇に在らず、但だ事事、之と相ひ反するに在り。彼、殘を以てし、我、仁を以てす。彼、貪を以てし、我、義を以てす。其の倒懸を解けば、便ち已に之を衽席に登らせ、之を湯火より出し、斯れ之を清涼に沃すと爲す）」（同書一一頁）と、まるで『三國志演義』における劉備の臺詞のようなことを言っている程であり、明清變革に關する情報を求めている日本知識人のニーズに必ずしも應えられる内容ではなかった。

續いて第四に擧げられるのが、いわゆる「和蘭風說書」である。これはその表題からも判るように、長崎出島に駐在するオランダ東インド會社の商館長から幕府に提出された、海外情報に關する報告書である。[13] そこには、オランダ東インド會社の知る得る限りにおける世界各地の情報が盛られているが、當然のことながら、同社と利害關係のない地域に關する

情報は絶無と言ってよい。従って、オランダが支配していた臺灣に關する情報は極めて詳細なものだが、中國本土に關する情報はごく斷片的なものとなっている。そのなかで明清變革に關する有用な情報としては、鄭成功による臺灣侵攻が、寛文元年（一六六一）および同二年（一六六二）の風説書に記されていることが擧げられる。そこにおいては、オランダ側から見た鄭成功軍のゼーランディア城（安平鎭）攻略までの戰況が記されているのだが、詳細に、そしてかなりの惡意を以て記されている鄭成功軍の活動は、幕府の首腦部にも相應のインパクトを與えたことと思われる。本風説書も、寫本のみによって流通していたことは、『韃靼漂流記』と同様である。

また、現在の沖繩縣に位置していた琉球王朝は、當時、日中雙方と外交關係を有し、活發な交易を行っていたため、清朝からの公文書や貿易船からの情報など、明清變革に關する多くの情報を幕府に對して報告している。[14] その中、重要なものが『華夷變態』に收められているのは、朝鮮王朝からの情報の場合と同様である。

以上、當時における中國關係の情報源五つを擧げてきたが、それらに比して、質的にも量的にも最高位に位置するのが、『華夷變態』である。同書は、前述の「和蘭風説書」と同様に、長崎に入港した中國船の乘組員たちから集めた情報を幕府に報告した、いわゆる「唐船風説書」のうち、明清變革期のものを林鵞峰とその子林鳳岡（信篤、正保元年［一六四四］～享保十七年［一七三二］）がまとめたものであり、初めの六卷、延寶六年（一六七八、康熙十七年）までが鵞峰によるものである。そこにおいては、中國から傳えられる錯綜した情報と、鵞峰およびその父羅山が參加した會議とについて詳細に記されており、明清變革期の日本の對中外交に關する一次資料となっている。[15]

以下、本稿においては、主として『華夷變態』によりつつ、幕府の對清外交と、林羅山・鵞峰父子との關わりを追っていきたい。

同書卷一冒頭においては、正保元年（一六四四、崇禎十七年、順治元年）における、長崎の唐人商人からの報告書三通、朝鮮王朝東萊府よりの使者の對馬における談話一通が記されている。これらによれば、この時點において幕府首腦が李自成の亂による崇禎帝の死、その後の吳三桂の清軍に對する降伏、史可法による福王の擁立といった同年における諸事件をほぼ正確に把握していたことは明らかである。その次に記さ

れているのが、林高という中國人が長崎に持參した、隆武元年（一六四五、正保二年、順治二年）十二月十二日の紀年を有する鄭芝龍の配下の武將と思われる崔芝からの、兵三千、甲二百領の援助を求める文書二通である。その全文を記した後、春齋（鵞峰）による、正保二年十二月の紀年を有する以下のコメントが記されている。

右崔芝が書二通、林高長崎へ持來、江戸へ傳達、老中被備上覽、春齋於御前讀之、其後松平伊豆守、依上意、井伊掃部頭直孝宅へ行向ひ、春齋讀之、・・・（『華夷變態』卷一、上册一三頁）

なお、崔芝の書簡を羅山ではなく鵞峰が讀み上げているのは、この年、羅山が病氣がちだったためである。[16] また、暮れも押し迫った十二月三十日になって鵞峰が法眼に任ぜられているのは、この任務と關係するものであろう。

この崔芝よりの援兵要請に對しては、老中松平伊豆守（信綱）より、日本と中國の國交が長らく途絶えていることを理由に斷るようにとの指示が翌正保三年（一六四六、隆武二年、順治三年）正月十二日に出たが、その指示は、「右上意之趣、松平伊豆守承て殿中にて春齋自筆に書之、後右筆も不知之」（『華夷變態』卷一、上册一四頁）という、幕府の書記すらも知らないという最高機密であり、鵞峰が事實上の幕府の外交顧問であったことを如實に物語るものといえるであろう。[17]

さて、右の判斷が下されてすぐの正保三年秋に、今度は鄭芝龍自身による、隆武二年八月十三日付の援兵要請の書簡が長崎に屆けられ、同年十月に江戸にその情報が傳えられた。[18] この件に關しては、鄭芝龍の書簡および進物の實物は殘っていないものの、羅山の記憶によって記されており、鵞峰によるその前文には、以下のようにある。

老中其趣を言上す、先考於御前讀進す、數日評議あり、尾張紀伊の兩大納言も登城、右之書簡春齋これを讀む、阿部對馬守番たるに依て、右の書簡どもを預り、毎日出納し、毎度自ら封して漫に他見を許さず、故に寫すことあたはず、然れども毎日評議の席に侍るゆへ、其大概の趣を先考自筆にこれを書すこと如左、（『華夷變態』卷一、上册一七頁）

この文中に「先考（羅山）於御前讀進す」とあることから、

鵞峰のみならずその父羅山も、將軍、老中、親藩の參加する、この極めて祕密度の高い會議に參加していたことが判る。

今回の援助の要請に對する幕府の態度が、前回の崔芝からの要請の際に比して愼重なものであったことは、『華夷變態』に、「勘文」として、魏明帝から萬曆四十七年（一六一九、元和五年）に至る、中國より日本に宛てられた、九通の書簡が擧げられており、その後に、「右之勘文、正保三年十月十六日、依上意獻之」（『華夷變態』卷一、上册二二頁）とあることからも判るが、この「勘文」は、「編著書目」[19]に、「日本大唐往來　一卷。正保年中、大明福州鄭芝龍、與韃虜戰而獻書、請援兵於本邦時、應敎而獻之（日本大唐往來　一卷。正保年中、大明福州の鄭芝龍、韃虜と戰ひて書を獻じ、援兵を本邦に請ふ時、敎に應じて之を獻ず）」と記錄されているもので、羅山の手になるものなのである。[20]

さて、このような愼重な準備の上で、十月十日に御茶室、同月十六日に將軍御座所での會議が開かれている。[21]この日程から見ても、上記の「勘文」は、この十六日の會議の際に將軍に提出されたものであろう。また、これらの會議のうち、羅山の參加が明記されているのは、御茶室における十日の會議である。[22]これらの會議においては、『德川實紀』に「芝龍が援兵を請ひ奉りし時。三家（德川御三家）に議を下されたるに。尾紀水三卿ともに人數を引具し。出勢し給はんことをこはれしといふ」（『德川實紀』第三篇、四六〇頁）とあり、[23]鵞峰の次男である林鳳岡も『寛永小說』[24]において活寫しているように、鄭芝龍への援助を主張する意見も出されたようであるが、結局は拒否に決定し、そのための長崎への使者を決定したところで、長崎から以下の知らせが屆いた（『華夷變態』卷一、上册二四頁）。

同十月十七日長崎ヨリ十月四日ノ書狀到來、其趣ハ八月下旬韃靼人閩中ヘ攻カケ山賀關ヲ攻破ル、大明人不及戰而迎降ル、韃靼人延平ヘ攻入ル、唐王出奔江西之甘中、其后ハ自殺ス、或曰爲韃被捕、八月廿八日鄭芝龍福州ヲ避テ、舟ニ乘テ、福州ヨリ三里サカリ、海上ニアリ、王孫文武官幷芝龍ガ妻子、皆乘舟奔泉州、陸路ニハ一揆起テ濫妨スルユヘ、福州ノ落人皆舟ニ乘テ逃去、官人ハ不及申富民マデモ皆福州ヲ逃出ヅ、貧民バカリ福州ニ殘リ留ル、韃人未入福州、而延平ヨリ九月二日三使ヲ以テ芝龍方ヘ遣シ、髮ヲソリ降參セバ、福建廣東江西三省ヲ芝龍ニアタヘ王トスベシ、云云、芝龍返事ニ髮ヲソラズ、我マヽニテソノママヲキ、三省ヲ領セシメ

バ、降人トナリテ、納貢スベシト、云云、三使其通ヲ韃酋ヘ告ベシトテ、延平ヘカヘルト、云云、

この知らせは鄭芝龍、および南明政權にとって致命的なものであり、長崎への使者の派遣すらも取りやめとなり、鄭芝龍が主導した、二回にわたる援助要請にまつわる騒動は完全に終幕を迎えることとなったのである。

これら二回の援助要請を巡る幕府の對應に、林羅山・鵞峰父子が大きく關わっていたことは、以上の經緯からも明らかであろう。それを踏まえた上で記されたのが、本稿冒頭で擧げた、羅山の「過明論」だったのである。福州方面の戰況が記されていることから見て、この論が記されたのが同年十月十七日以降であった事は間違いがない。そのことを踏まえた上で、以下において「過明論」の內容の概要を見ていくこととしたい。

「過明論」では、その冒頭において、「古曰獯鬻、黃帝之所逐也。蓋今之韃靼也。其投化而久者曰熟韃靼。其新到者曰生韃靼（古に獯鬻と曰ふ、黃帝の逐ふ所なり。蓋し今の韃靼なり。其の化に投じて久しき者を熟韃靼と曰ふ。其の新たに到る者を生韃靼と曰ふ）」と、黃帝以來の韃靼の歷史が述べられている。そしてそれに對する中國側の取るべき對應としては、「當其寇掠之時乃驅逐之、而去者不追。故詩云、薄伐玁狁、至于太原。其不務外、不拓遠、唯能守中而不失禹服、亦可也。萬乘之多、五等之列、九州之廣、何外求哉。中國之爲中國也、亦可也（其の寇掠の時に當りて乃ち之を驅り逐ひて、去る者は追はず。故に詩に云ふ、薄に玁狁［けんいん］を伐ち、太原に至る、と。其れ外に務めず、遠きを拓かず、唯だ能く中を守りて禹服を失はざれば、亦た可なり。萬乘の多き、五等の列、九州の廣き、何ぞ外に求めんや。中國の中國爲れば、亦た可なり）」と、中國の領域から追い拂えば充分であるとしている。その後、明代に至る漢族と少數民族との抗爭の歷史が述べられているが、宋代における文天祥・陸秀夫・張世傑・謝枋得の活躍は、「豈翅忠臣義人之志而已哉。周程張朱道學遺風之所廣覃也（豈に翅に忠臣義人の志のみならんや。周程張朱、道學の遺風の廣く覃［の］ぶる所なり）」と、道學の遺風に據るものとしている。

一方、明代一般の風氣について「吾偶見大明中世以降文武官人所著書、乃稱今上德行政事與堯舜何異哉、漢祖唐宗不足比焉、稱執事者與伊傳周召何異哉、蕭曹房杜不堪言焉。豈非孟浪乎。至如稱學術與孔顏同此意、濂溪明道唯秀才而已、其餘視之直下、豈非妄誇乎（吾れ偶〻大明中世より以降の文武官

人の著す所の書を見るに、乃ち今上の德行政事、堯舜と何ぞ異ならんや、漢祖唐宗も比するに足らず、と稱し、執事の者、伊傳周召と何ぞ異ならんや、蕭曹房杜も言ふに堪へず、と稱す。豈に孟浪に非ずや。學術は孔顏と此の意を同じくし、濂溪明道も唯だ秀才なるのみ、其の餘、之を視ること直下す、と稱するが如きに至りては、豈に妄誇に非ずや）」と述べた後、「況天啓崇禎二十餘歲之際、君暗而貪、臣曲而僞、璫嬖用事、內外壅滯、賄賂公行、風俗頽敗、學術雜亂、異同萬端。黎民奈何可堪哉（況や天啓崇禎二十餘歲之際、君暗くして貪り、臣曲りて僞り、璫嬖［たうへい］事を用ひ、內外壅滯し、賄賂公に行はれ、風俗頽敗し、學術雜亂し、異同萬端す。黎民奈何ぞ堪ふべけんや）」と、明の滅亡の際の哀れな狀況に觸れて、その風氣の退廢を激しく非難している。

そのような中、彼が注目すべき人物として言及しているのは、吳三桂・史可法・鄭芝龍および芝龍の弟である鄭鴻逵の四人である。彼らに關する言及の中には、「獨吳三桂急往韃靼、頻乞援兵十萬而來擊。會闖賊焚燕京、大虜掠而西。三桂因發兵、逐之走之。賊雖相戰不得利、乃弃所掠之女子財寶大半而去。三桂追擊不歸。於是韃靼人乘隙取燕京、如入無人之地（獨り吳三桂、急ぎ韃靼に往き、頻りに援兵十萬を乞ひて來り擊つ。會〻闖賊、燕京を焚き、大いに虜掠して西す。三桂、因りて兵を發し、之を逐ひ之を走らす。賊、相ひ戰ふと雖も利を得ず、乃ち掠する所の女子財寶の大半を弃てて去る。三桂、追擊して歸らず。是に於て韃靼人、隙に乘じて燕京を取ること、人無きの地に入るが如し）」と吳三桂について述べているような若干の過ちはあるものの、史可法の死を含めてほぼ正確に把握しているといえるだろう。

このように明末の戰亂について述べた後、羅山は「風聞丙戌季秋之末、韃人入延平、而福京亦亂敗。不知果如何也（風聞す、丙戌季秋の末、韃人、延平に入りて、福京も亦た亂れ敗る、と。知らず、果して如何）」と福州方面における最新の戰況に觸れ、「三桂之誘韃人、猶如唐之借回鶻乎。韃之入燕京、暴於回鶻爲唐患乎。然則三桂之功與罪、必有辯也。可法之顚末、雖未詳知、然身既死則無異論歟。宜哉、天祥秀夫輩、雖死如生。是宋儒學問之餘力歟（三桂の韃人を誘ふは、猶ほ唐の回鶻を借るが如きか。韃の燕京に入るや、回鶻が唐の患ひを爲すより暴なるか。然らば則ち三桂の功と罪とは、必ず辯有るなり。可法の顚末は、未だ詳かに知らずと雖も、然れども身、既に死すれば則ち異論無きか。宜なるかな、天祥秀夫が輩、死すと雖も生くるが如し。是れ宋儒の學問の餘力か）」と、吳三桂等と宋代の人物との比較を行い、「今之韃酋不可抗阿保機阿骨打鐵木眞忽必烈之

氣勢。趙宋拒之掃之一百數十年、久保宗社。孰與大明纔二三年間悉殲哉。明人之詈宋人者可以螫口（今の韃酋、阿保機阿骨打鐵木眞忽必烈の氣勢に抗するべからず。趙宋之を拒ぎ之を掃ふこと一百數十年、久しく宗社を保つ。大明、纔かに二三年の間に悉く殲［ほろ］ぶるに孰與［いづれ］ぞや。明人の宋人を詈る者、以て口を螫［さ］すべし）」と、再び宋代との比較において明人を激しく非難している。その後彼は、女眞人の立場からの、夷狄と中華の區別は絶對的なものではないとの辨明に對し、「不然。今見其人物風俗、則中國與江南古人禮儀法制政事文章有猶在。與北虜羶腥之卑而不知禮儀、去禽獸不遠者、霄壤懸隔（然らず。今、其の人物風俗を見れば、則ち中國と江南とは古人の禮儀法制政事文章、猶ほ在ること有り。北虜羶腥の卑しくして禮儀を知らず、禽獸を去ること遠からざる者と、霄壤［せうじやう］の懸隔なり）」と、華夷の別が嚴然として存在していることを主張している。

その後、彼は今後の見通しについて、「福王之所終、李氏張氏之亂賊興亡、未能知、則復不得云如之何耳（福王の終る所、李氏張氏の亂賊の興亡、未だ知ること能はざれば、則ち復た之を如何と云ふを得ざるのみ）」と、なお前途が不明であることを述べ、モンゴル以外の夷狄による中國支配は短期間で終わったことを述べるが、一方で清朝皇帝については、「今之韃酋所爲、善惡未可知也（今の韃酋の爲す所、善惡未だ知るべからざるなり）」とその善惡について述べるのを避けている。そして最後に長崎への南蠻船の渡來へと話を移し、「就想蠻舶之往還於我者猶有在。何其與中國不能相通、而使蠢爾蛇種涉我域乎（就て想ふ、蠻舶の我に往還する者、猶ほ在ること有り。何ぞ其の中國と相ひ通ずること能はずして、蠢爾の蛇種をして我が域に涉らしむるや）」と、問題提起を行う。しかしここでも彼は、今後の對應については「不在其位、不謀其政。則國家者非散焉者之所議也（其の位に在らざれば、其の政を謀らず。則ち國家は散焉者の議する所に非ざるなり）」と、自己は當局者でないので語ることはできないと逃げた後、「狄與蠻雖爲異方、然其獸心之所向、何異哉。戒之愼之。奈何奈何（狄と蠻と異方爲りと雖も、然れども其の獸心の向ふ所、何ぞ異ならんや。之を戒め之を愼め。奈何、奈何）」として全文の結びとしているのである。

この文章においては、羅山の特色である博識が全文に溢れており、中國の歷史を中華と夷狄の抗爭の歷史とする彼の史觀も實に明快なものである。そして彼は韃靼人についても、「去禽獸不遠者（禽獸を去ること遠からざる者）」とまで斷言しているのである。

ところが、その末尾において、「今之韃酋所爲、善惡未可知也（今の韃酋の爲す所、善惡未だ知るべからざるなり）」と、清朝の皇帝について善惡の判斷を述べるのを回避し、南蠻船への對處についても、「不在其位、不謀其政。則國家者非散焉者之所議也（其の位に在らざれば、其の政を謀らず。則ち國家は散焉者の議する所に非ざるなり）」と口を濁しているのは何故なのであろうか。彼が「國家者非散焉者之所議也（國家は散焉者の議する所に非ざるなり）」と、當局者でないと逃げているのは、上述のごとく、彼が將軍及び老中の參加する、外交に關する祕密會議に出席したことを知っている我々からすれば、明らかな虚言なのである。

結論から言うならば、彼が、彼自身の華夷の辯に關する理論からすれば明白な結論から逃げているのは、彼が「散焉者」だったからではなく、むしろ彼が「其の位に在」ったればこそであった。南明軍からの乞師に對する幕閣の見解は、必ずしも統一されたものではなく、前述のごとく、出兵を主張する意見が幕府の最上部においても根强く存在していたことは、羅山の孫である鳳岡さえもが記錄しているのである。このような微妙な問題において自己の見解を聲高に主張することは、羅山にとっては、そのリスクがあまりにも大きすぎるものと考えられたのではないだろうか。

このような二度にわたる、南明側からの乞師の要請の後、德川幕府と清朝との間においては、公式の外交關係こそ無いものの、長崎を據點とする貿易が繼續されていた。しかしながら、三藩の亂（康熙十二年［一六七三］～康熙二十年［一六八一］）によって、事態は再び緊迫した局面を迎えることとなった。『華夷變態』卷二によれば、延寶二年（一六七四、康熙十三年、永曆二十八年）六月三日に長崎奉行より、吳三桂および鄭經による檄文、その和譯、そして福州船よりの風說書の計五通が江戸の老中、久世廣之に屆けられ、それが同月六日に江戸城へと轉送されたのである。その中、鄭經の檄文の日付は永曆二十八年四月一日であるから、その發布からわずか二ヶ月で江戸まで屆いたことになる。

本論の冒頭において擧げた、林鵞峰による「華夷變態序」（『華夷變態』卷一）の日付は六月八日である。そのことを考えるならば、そこにおける鵞峰の高揚した氣持ちが理解できるであろう。彼は當時の東アジアにおける、この大ニュースの第一報が江戸に屆いた、わずか二日後にこの文を記しているのである。

この文は、その冒頭において、「崇禎登天、弘光陷虜、唐魯纔保南隅、而韃虜横行中原。是華變於夷之態也（崇禎、天に登り、弘光陷虜に陥り、唐魯、纔かに南隅を保ちて、韃虜、中原に横行す。是れ華、夷に變じるの態なり）」と、現在の中國が「夷」へと變わっていることを認める。その後三十年、羅山、そして鵞峰は中國から傳えられる情報のすべてに關わってきた（羅山は明暦三年［一六五七］に没している）。「按朱氏失鹿、當我正保年中。爾來三十年所、福漳商舩來往長崎、所傳說有達江府者。其中聞於公、件件讀進之、和解之。吾家無不與之（按ずるに朱氏、鹿を失ふこと、我が正保年中に當る。爾來三十年所［ばかり］、福漳の商舩、長崎に來往して、傳說する所、江府に達する者有り。其の中、公に聞するは、件件、之を讀進し、之を和解す。吾が家、之に與らざる無し）」。これらの文書の亡失を恐れ、鵞峰はそれを册子にまとめることとしたのである。「其草案留在反古堆。恐其亡失、故敘其次第、錄爲册子、號華夷變態（其の草案、留りて反古の堆に在り。其の亡失を恐れ、故に其の次第を敘して、錄して册子と爲し、華夷變態と號す）」。そして最後に、吳三桂等の蜂起の知らせを受けて、彼はその本心を明らかにする。「頃聞吳鄭檄各省、有恢復之舉。其勝敗不可知焉。若夫有爲夷變於華之態、則縱異方域、不亦快乎（頃聞［けいかん］、吳鄭、各省に檄し、恢復の舉有り。其の勝敗、知るべからず。若し夫れ夷、華に變ずるの態を爲すこと有るときは、則ち縱ひ方域を異にすとも、亦た快ならずや）」。彼は羅山とは異なり、自己が吳三桂の側に心情的に荷擔していることを明確に宣言している。そこには、「『夷狄が中華の態を變えるのは愉快だ』と言い放って、儒の本家中國に頭の上がらぬ儒者の無邪氣さが現れていて面白い」（前記川勝氏）と言われるような意味における「無邪氣さ」などはかけらも存在してはいないのである。

しかしながら、彼のこの高揚した氣持ちは長續きはしなかった。延寶六年（一六七八、康熙十七年、昭武元年）七月、彼は吳三桂が帝位に就いたという衝擊的な報せを受け取ったのである。七月三十日、彼はその感慨を口述筆記させた。題を「吳鄭論」という（『鵞峰先生林學士文集』卷四十八）。

「吳鄭論」の冒頭を、彼は以下のような文で始める。「韃虜掠華殆四十年。正史未見則不詳眞僞（韃虜、華を掠むること殆ど四十年。正史、未だ見［あらは］れざれば則ち眞僞を詳らかにせず）」。續いて、崇禎末年以來の戰亂を自己の知る範圍で述べるが、その際中心となる人物のうち、吳三桂、史可法、鄭芝龍までは羅山の「過明論」とほぼ同樣であるが、鵞峰のこの

文において、その後の鄭成功、さらにその子鄭經の活躍に大きく紙幅を割いているのは、その後の時間の經過によるものであろう。

その後三十年、吳三桂の消息を聞くことはなく、すでに亡くなっているかと思っていたところ、「延寶甲寅之夏、長崎司達吳三桂鄭錦舍檄文、是福州商舶傳寫而載來也。・・・由是初知三桂猶存、以待時運之至也。若事遂功成、則雖夏靡之擧不爲過乎。縱事不成、亦翟義之髣髴乎。推算其齡、則可超古稀。此人長生、天其於朱氏祐之乎（延寶甲寅［二年］の夏、長崎司、吳三桂鄭錦舍の檄文を達す、是れ福州の商舶、傳寫して載せ來るなり。・・・是に由りて初めて知る、三桂猶ほ存して、以て時運の至るを待つことを。若し事遂げ功成らば、則ち夏靡の擧と雖も過ぎたりと爲さざらんか。縱ひ事成らざるも、亦た翟義の髣髴か。其の齡を推して算［かぞ］ふれば、則ち古稀を超ゆべし。此の人の長生は、天、其れ朱氏に於て之を祐くるか）」。ここでも、彼はその知らせを始めて受け取った際の自身の興奮を隱そうともしない。しかしながら、衝擊的な知らせが屆く。「頃聞、長崎傳達東京船之言曰、戊午三月、吳三桂卽帝位、建元曰昭武、國號大周。抑街談巷說乎。若其果然、則三十年來之素心、至是而見、而非忠義而簒奪也（頃［このごろ］聞く、長崎、東京船の言を傳達して曰く、戊午三月、吳三桂、帝位に卽き、元を建て昭武と曰ひ、國を大周と號すと。抑〻街談巷說か。若し其れ果して然らば、則ち三十年來の素心、是に至りて見［あらは］れて、忠義に非ずして簒奪なり）」。ここにおいて、彼は吳三桂の擧兵への信頼を一擧に失うこととなった。それがいかに深いものであったかは、吳三桂と共に擧兵した鄭經、さらにはその他の將軍たちすべてに對しても懷疑的となってしまったことから明らかである。「聞先是鄭氏亦奉一帝、建永曆之號。不知自今而後、其事成而不變所守乎、有私營之謀乎。又聞、吳鄭之外、如福建耿氏及孫將軍平南王、各割據一方。然始與吳鄭相應、又降韃寇。吳鄭則蜂蟻之類、不足算也（是より先、鄭氏も亦た一帝を奉じて、永曆の號を建つを聞く。知らず、今よりして後、其の事成りて守る所を變ぜざらんか、私營の謀有るか。又た聞く、吳鄭の外、福建の耿氏及び孫將軍平南王の如き、各〻一方に割據す。然も始め吳鄭と相ひ應ずるも、又た韃寇に降ると。吳鄭は則ち蜂蟻の類、算［かぞ］ふるに足らざるなり）」。かくして彼は以下のように自己の感慨を述べる。「古人謂、周公早終、則流言之冤不能明、王莽早死、則永爲恭儉之人。信哉。故曰毀譽蓋棺了者、亦是不爲虛言乎（古人謂く、周公早く終はれば、則ち流言の冤、明らかにすること能はず、王莽早く死すれば、則ち

永く恭儉の人爲らんと。信なるかな。故に毀譽、棺を蓋［おほ］ひて了［をは］ると曰ふ者も、亦た是れ虚言爲らざるか）」。そして最後に、冒頭に對應する以下のような文を述べ、正史がすべてを明らかにするであろうとして、全文の結びとするのである。「戊午七月晦夜、雨滴檐。獨坐燈淡。口授侍史、記所聞小概。待中華歸一、正史載來以決之（戊午［延寶六年］七月晦夜、雨、檐に滴る。獨り坐すに燈淡し。侍史に口授して、聞く所の小概を記す。中華、一に歸し、正史載せ來るを待ちて以て之を決せん）」[25]。

この文章および「華夷變態序」に表れている、吳三桂の擧兵を知った際の興奮ぶり、そしてこの文章における、吳三桂が帝位に就いたことを知った際の落膽ぶりからは、彼が中華において正義が行われることを心から信じており、だからこそ、それが裏切られた際にいかに絶望したかが傳わってくる。しかもここまで絶望してもなお、彼は「正史」が傳わってくるまでは最終的な判斷を保留しようとしているのである。鵞峰にとって、明末清初の動亂とは、決して「異邦の傍觀者の立場から」、「無邪氣」に見ることができるものではなかったのだった。

なお、『華夷變態』のうち、鵞峰の見解が記されているのは卷六までであるが、その末尾に記された「貳拾六番普陀山船唐人共申口[26]」は、吳三桂の健在を傳えるものであった。鵞峰の歿年は延寶八年（一六八〇、康熙十九年）なので、その子林鳳岡の手になる『華夷變態』卷七に收錄されている、吳三桂の死亡を傳える記事を含む「拾番廣東船之唐人共申口[27]」を目にしていたことと思われる。しかしながら、吳三桂の死に關する鵞峰の感慨は、今日殘されている資料からは窺い知ることができない。そして鵞峰の死の翌年、康熙二十年（一六八一、延寶九年）に三藩の亂は終熄したのである。そのことを知り得なかったのは、鵞峰にとってあるいは幸いだったのかもしれない。

附錄

「過明論」（『羅山林先生文集』卷二十四）

古曰獯鬻、黄帝之所逐也。蓋今之韃靼也。其投化而久者曰熟韃靼。其新到者曰生韃靼。其猾憂之戒、其嚴乎。殷曰鬼方、高宗之所克也。周曰玁狁、宣王之所伐也。漢曰匈奴、元魏曰高車部、唐曰突厥、曰回鶻。及五季之時曰契丹、趙宋曰遼。當其寇掠之時乃驅逐之、而去者不追。故詩云、薄伐玁狁、至于太原。其不務外、不拓遠、唯能守中而不失禹服、亦

可也。萬乘之多、五等之列、九州之廣、何外求哉。中國之爲中國也、亦可也。其曰狄、曰胡、曰羯、曰貊、曰虜、皆賤惡之稱、而獸類之犬種之也。自後耶律氏雖盛於朔方、然澶淵之役見趙氏之强、而後爲兄弟伯叔之約。干戈久止、聘使互通、殆百年。完顏氏漸發、遂滅耶律氏。夫以阿骨打之勇力、迪吉之暴猛、兀朮等之善用兵、無不有一日伺宋、而不克涉江。且約且背、一戰一和、復數十年。況有宗澤岳飛張韓劉等之勤王之軍、節義之士乎。帝渥溫氏勃起孔熾、遂滅完顏氏。既而其勢益盛愈大、乃涉江而南、趙氏將絕如縷。方如是之危急、猶有文天祥粉骨于軍中、陸秀夫抱孤于舟裏、張世傑浮海而沒、謝枋得絕穀而死。豈翅忠臣義人之志而已哉。周程張朱道學遺風之所廣覃也。吾偶見大明中世以降文武官人所著書、乃稱今上德行政事與堯舜何異哉、漢祖唐宗不足比焉、稱執事者與伊傳周召何異哉、蕭曹房杜不堪言焉。豈非孟浪乎。至如稱學術與孔顏同、此意濂溪明道唯秀才而已、其餘視之直下、豈非妄誇乎。稱文字則自比左屈遷固、而超越唐宋、豈非杜撰乎。稱歌詩則浸淫漢魏、追逐李杜、而跨過宋元。雖然偶觸目、則其文章詞賦、稍覺淺近而輕薄。視之中州集元朝文類、則具眼者可知優劣。然況於古人乎。稱將帥者謂暗合孫吳、指揮韓白。雖然我關白兵入朝鮮、彼來救之、其百不能當我一、則孫吳豈其然乎。且欲異先儒之說、則或妄作某氏家諜、或謾自托曰發古塚以得奇異之書、而屢議古人、詈先輩、皆是諂上誣下、而自欺自衒者耶。況天啟崇禎二十餘歲之際、君暗而貪、臣曲而僞、璫嬖用事、內外壅滯、賄賂公行、風俗頹敗、學術雜亂、異同萬端。黎民奈何可堪哉。於是闖賊獻賊蟻屯蜂起、所到莫不脅從、所擊莫不偃靡。闖據陝西、獻據四川。甲申之年闖賊果破燕京、有內應而城門不守、賊兵且攻且燒。帝自經死、后妃王子共殞命。不大哀乎。未聞有一人可以碧葬者。不甚恨乎。獨吳三桂急往韃靼、頻乞援兵十萬而來擊。會闖賊焚燕京、大虜掠而西。三桂因發兵、逐之走之。賊雖相戰不得利、乃弃所掠之女子財寶大半而去。三桂追擊不歸。於是韃靼人乘隙取燕京、如入無人之地。京師驚而愈懼。南京史可法聞之、立萬曆帝孫福王爲天子、卽位于金陵。韃人率兵涉江、亦有內應而南京敗、福王爲虜、可法死之。不亦痛悼乎。於是鄭芝龍及弟鴻逵立高祖九世孫唐王爲帝於福州。風聞丙戌季秋之末、韃人入延平、而福京亦亂敗。不知果如何也。夫以大明二百七八十年之流風餘韵、而不過二三年而內爛而亡、外鑠而消。何其急速也。明人之謗宋人者可以赧然。三桂之誘韃人、猶如唐之借回鶻乎。韃之入燕京、暴於回鶻爲唐患乎。然則三桂之功與罪、必有辯也。可法之顚末、雖未詳知、然身既死則無異論

歟。宜哉、天祥秀夫輩、雖死如生。是宋儒學問之餘力歟。今之韃酋不可抗阿保機阿骨打鐵木眞忽必烈之氣勢。趙宋拒之掃之一百數十年、久保宗社。孰與大明纔二三年間悉殲哉。明人之詈宋人者可以螫口。雖然三代姑舍是。兩漢唐宋之引世、與大明均是永長也。而今如此、可以痛歎矣。且試言之。彼曰、我是淳維之裔也。瞽鯀之子有舜禹、焉知淳維之不爲賢也。匈奴不可賤也。以周大王之賢、尙事獯鬻。以漢帝之雄略才謀、與匈奴爲兄弟行、共爲婚姻、平禮通書。以唐太宗之英武、而彼呼爲天可汗、亦許之不爲不可也。元魏指劉宋蕭梁爲島夷、夷狄斥罵中國人則推喚曰漢。然則北不必賤、南不必貴。且夫江南者荊楚吳越之地、而福建者閩甌之域也。詩云、戎狄是膺、荊舒是懲。吳越大國、雖僭王、而春秋於吳越稱子者、夷狄之也。何得爲中國乎。故遼與宋與金分南北可以爲兩朝、亦非無其謂也耶。況又胡元之混一南北乎。曰、不然。今見其人物風俗、則中國與江南古人禮義法制政事文章有猶在。與北虜羶腥之卑而不知禮義、去禽獸不遠者、霄壤懸隔。夫周南之風行于江漢之閒、則文王周公之德化及於楚、奚疑哉。太伯之至德教之於吳、則越亦須受其餘波。孰與淳維韓王信盧芳等之逃奔匈奴者哉。不可同年而談也。福王之所終、李氏張氏之亂賊興亡、未能知、則復不得云如之何耳。嗚呼、惟命不于常。可畏哉。且惟典午之季、五胡十六夷狄新覇中國者、猛强盖世。然或十數年、或二三十年、皆僅不滿半百而滅。唯古今之閒胡元累業一百五六十年。是豈非鐵木眞窩闊臺拓雷忽必烈父子兄弟伯侄相繼而雄武智計、且用中國人物、使爲政事之故乎。今之韃酋所爲、善惡未可知也。就想蠻舶之往還於我者猶有在。何其與中國不能相通、而使蠢爾虵種涉我域乎。不在其位、不謀其政。則國家者非散焉者之所議也。狄與蠻雖爲異方、然其獸心之所向、何異哉。戒之愼之。奈何奈何。

「華夷變態序」（『華夷變態』卷一）

崇禎登天、弘光陷虜、唐魯纔保南隅、而韃虜横行中原。是華變於夷之態也。雲海渺茫、不詳其始末。如勦闖小說、中興偉略、明季遺聞等槩記而已。按朱氏失鹿、當我正保年中。爾來三十年所、福漳商舩來往長崎、所傳說、有達江府者。其中聞於公、件件讀進之、和解之。吾家無不與之。其草案留在反古堆。恐其亾失、故敘其次第、錄爲册子、號華夷變態。頃閒吳鄭檄各省、有恢復之舉。其勝敗不可知焉。若夫有爲夷變於華之態、則縱異方域、不亦快乎。

延寶二年甲寅六月八日　　弘文學士　林叟發題。

「吳鄭論」（『鵞峰先生林學士文集』卷四十八）

韃虜掠華殆四十年。正史未見則不詳眞僞。然本朝升平、西海波穩、德風廣覆。福泉商舶洊至長崎、譯鞮通語、津司驛傳具達。故余輩竊有聞焉。崇禎甲申、明帝賓天、闖賊陷燕京。吳三桂守山海關、不從賊、假北虜之援、以討賊、報君王之讐。可謂忠也。然虜之貪戾、據燕京、自取之不歸、移三桂於雲南、以爲遠藩、遂幷呑南京、擒明嗣王。義臣史可法死節云。華域悉被腥風染、猶奇渥溫氏時勢也。唯福州鄭芝龍尊立明之唐王、以存恢復之志。當我正保二年乙酉、芝龍慮其力與賊不兩立、欲請援兵於我邦、先試使邊將崔芝達其趣於長崎司。而三年丙戌、聘使船既發、遇賊於洋中、被掠奪也。再聘之艤未成、福州陷、芝龍爲降虜。然其子森官（名彩、字成功、俗呼曰森官）猶奉明主、纔保南隅、賜國姓、號朱成功、屢與賊戰、互有勝負。每歲發船渡長崎、貨殖以厚軍備之利、稱其船曰國姓爺也。嘗聞、芝龍少時貧賤、來寓平户、賣履送歲、俗稱一官。娶妻生子、乃是森官也。芝龍歸明、討南海賊、能用兵、有大功、時稱良將、擇爲福州之帥、管南方水路云。寛永年中、憑商舶請長崎司、經官裁使其妻及森官得至福州。芝龍降時、其妻自殺、而森官所爲如此。皆言、母子共存日本武勇之風。想夫芝龍以一隅對强大之敵、可謂赳赳丈夫也。及其困窮不能全節者、可以惜乎。或託名假義、欲營其自家乎、其中心果不可測乎。森官戰謀不劣於父。若天假之年、則不負成功之名乎。不幸短命、可以痛恨也。森官有子、曰錦舍（名經、俗呼曰錦舍）、不失其有與賊屢戰矣。吳三桂事寥乎不聞三十年、想夫既死矣。延寶甲寅之夏、長崎司達吳三桂鄭錦舍檄文、是福州商舶傳寫而載來也。三桂檄謂、起義兵於雲南、奉崇禎太子、既至陝西、傳檄於天下。其文詳悉。鄭檄亦同其趣。由是初知三桂猶存、以待時運之至也。若事遂功成、則雖夏靡之擧不爲過乎。縱事不成、亦翟義之髣髴乎。推算其齡、則可超古稀。此人長生、天其於朱氏祐之乎。爾來商船至長崎、傳說錦舍事多多、三桂事偶聞之、粗而不精。乃知錦舍所在者去長崎不甚遠、故商賈亦有所聞見。三桂所居者西南、海陸遙隔、故絕其親故乎。頃聞、長崎傳達東京船之言曰、戊午三月、吳三桂卽帝位、建元曰昭武、國號大周。抑街談巷說乎。若其果然、則三十年來之素心、至是而見、而非忠義而篡奪也。蓋彼亦倣曹操朱溫之跡、而又劉裕衰暮之歎、而不克終而然乎。蓋稱大周者、託爲吳泰伯之後乎。稱昭武者、擬昭烈章武之號乎。聞先是鄭氏亦奉一帝、建永曆之號。不知自今而後、其事成而不變所守乎、有私營之謀乎。又聞、吳鄭之外、如福建耿氏及孫將軍平南王、各割據一方。然始與吳鄭相應、

又降韃寇。吳鄭則蜂蟻之類、不足算也。古人謂、周公早終、則流言之冤不能明。王莽早死、則永爲恭儉之人。信哉。故曰毀譽蓋棺了者、亦是不爲虛言乎。戊午七月晦夜、雨滴檐。獨坐燈淡、口授侍史、記所聞小概。待中華歸一、正史載來以決之。

---

(1) そうした觀點からの代表的研究としては、堀勇雄『林羅山』(吉川弘文館、一九六四)を擧げることができる。一方、羅山の役割をより高く評價するものとしては、鈴木健一『林羅山―書を讀みて未だ倦まず―』(ミネルヴァ書房、ミネルヴァ日本評傳選、二〇一二)、揖斐高『江戸幕府と儒學者―林羅山・鵞峰・鳳岡三代の闘い』(中央公論新社、中公新書、二〇一四)がある。

(2) 『羅山林先生文集』卷二十四所收、寛文二年(一六六二)刊、早稻田大學圖書館藏。

(3) 『華夷變態』卷一、『華夷變態』上册、一頁、東洋文庫、一九五八。また『鵞峰先生林學士文集』卷九十、元祿二年「一六八九」序刊。現在、ペリカン社より「近世儒家文集集成」第十二・十三卷として影印。一九九七。なお、同書の解題において日野龍夫が本書の內題および目錄題を「鵞峰林學士文集」としているのは誤りである。

(4) 『華夷變態』上册による。『鵞峰先生林學士文集』では「檄」の字がない。

(5) 川勝守『日本近世と東アジア世界』、吉川弘文館、二〇〇〇、二三三頁。

(6) 眞壁仁「德川儒學思想における明淸交替：江戸儒學界における正統の轉位とその變遷」、『北大法學論集』六十二〈六〉、四六頁。

(7) 倭館とそこにおける交易に關しては、田代和生『新・倭館―鎖國時代の日本人町』(ゆまに書房、二〇一一)を參照。

(8) 『德川實紀』(林衡總裁、成島司直撰述。嘉永二年「一八四九」完成)、「大猷院殿御實紀」卷十二、吉川弘文館、新訂增補國史大系、德川實紀第二篇(底本は貴族院圖書室藏本)、一九八一、四五一頁。

(9) 當時、寫本は出版取り締まりの埒外に置かれていた。

(10) 書物としての成立は正保三年(一六四六)八月十三日。現在、平凡社『韃靼漂流記』(一九九一)に翻刻の上收錄。

(11) 『韃靼漂流記』に關しては、春名徹「韃靼漂流記―萬里の長城を越えて」(同氏『世界を見てしまった男たち』所收、文藝春秋社、一九八一、今ちくま文庫に改訂增補のうえ收錄、筑摩書房、一九八八)を參照。

(12) 『舜水先生文集』(正德五年「一七一五」刊)卷二十七、早稻田大學圖書館藏。現在、朱謙之編『朱舜水集』卷一に所收、中華書局、一九八一。ただし『朱舜水集』では題を「中

原陽九述略」としている。

(13) 「和蘭風說書」の翻刻としては、日蘭學會・法政蘭學研究會編『和蘭風說書集成』上下卷（吉川弘文館、一九七七、一九七九）がある。なお「和蘭風說書」の研究史に關しては、松方冬子『オランダ風說書と近世日本』（東京大學出版會、二〇〇七）序章第一節「研究史」を參照。

(14) 琉球王朝と日中兩國との關係の研究動向については、渡邊美季『近世琉球と中日關係』（吉川弘文館、二〇一二）序章「研究の動向と關心の所在」を參照。

(15) その內容は、國立公文書館藏本では、正保元年（一六四四）から享保二年（一七一七）までのものとなっている。なお、同書は現在、東洋文庫より上中下三册で翻刻のうえ刊行されており、本稿でも同書よりの引用はそれに據っている。一九五八～一九五九。

(16) 「年譜下」十五丁表～裏、『羅山林先生文集』附錄卷二。

(17) なお、ロナルド・トビ（Ronald P. Toby）が本書簡の口述筆記を羅山によるものとしているのは誤りである。同氏『近世日本の國家形成と外交』、創文社、一九九〇、一〇三頁、*State and Diplomacy in Early Modern Japan*, Stanford University Press, 1991, p. 120.

(18) 使者である黃徵明自身は海上で女眞人に捕らえられたが、鄭芝龍の書簡、進物、そして黃徵明の添え狀が到着したものである。『華夷變態』卷一、一七頁。

(19) 『羅山林先生文集』附錄卷四、「編著書目　應敎」、四丁裏。

(20) 文中の「應敎」とは、「命令によって」の意である。

(21) なお、當時の將軍は三代家光である。

(22) 『德川實紀』、「大猷院殿御實紀」卷六十五、吉川弘文館、新訂增補國史大系、德川實紀第三篇、一九七六、四五八～四六〇頁。

(23) 但し、『德川實紀』においてはこの文に續けて、紀州藩主德川賴宣は乞師に應じることに反對だったと、『南龍公譜略』の引用によって結論づけている（同書第三篇、四六〇頁）。

(24) 『續史籍集覽』第六册所收、すみや書房、一九七〇。

(25) なお、この文の紀年は上述のごとく戊午（延寶六年、一六七八、康熙十七年、昭武元年）七月晦日であるが、この點はやや疑問がある。というのは、現存する『華夷變態』を見る限り、確かに延寶六年の七月に、琉球から大量の情報が寄せられているが、そのなかに東京船からのものはなく、同年十月六日に到着した「貳拾三番福州船之唐人共申口」（同年九月十日の紀年、唐通事からの報告）において始めて吳三桂の卽位が報告されているものの、「去年より帝位に備り、則年號を光華と申しさうらひ」（『華夷變態』卷六、上册二七五頁）というあやふやな情報であり、『華夷變態』において吳三桂の卽位の知らせとその昭武という年號の雙方が現れているものは、翌延寶七年（一六七九、康熙十八年、昭武二年）三月十一日に受け取った、「壹番普陀山船之唐之共申口」（同

年二月二十三日の紀年、彭城仁左右衞門等、唐通事九人の連名。『華夷變態』巻七、上册二八三～二八四頁）が初めてのものだからである。あるいはこの「吳鄭論」は、この延寶七年における報告を受け取った後、前年の文章に修正を加えたものであるのかも知れない。

（26）延寶六年（一六七八、康熙十七年）十二月十八日の紀年、彭城仁左右衞門等、唐通事九人の連名。『華夷變態』巻六、上册二七八～二八〇頁。

（27）延寶七年（一六七九、康熙十八年）七月三日、唐通事よりの報告。『華夷變態』巻七、上册、二九七～二九八頁。

【本論文は、科學研究費補助金（基盤研究（C）課題番號17K02209）による成果の一部である。】

〈キーワード〉明清變革、林羅山、林鵞峰、華夷變態